

# ノーベル賞の国際政治学

## —ノーベル平和賞と日本：序説—

吉 武 信 彦

### International Politics of the Nobel Prize: An Introduction to the Nobel Peace Prize and Japan

Nobuhiko YOSHITAKE

#### 要旨

本稿は、国際政治学という視点からノーベル賞を捉え直し、その事例として平和賞に注目し、日本が同賞といかなる関係を歴史的に築いてきたかを考察するものである。日本人のノーベル賞受賞者は、2009年現在16名を数えるが、自然科学分野の受賞者が圧倒的である。その自然科学分野を中心に日本ではノーベル賞に対して絶対的な信頼感があるが、実際には選考側の恣意性、政治性が常に問題となる。ノーベル賞の政治的意図を考慮した上で、ノーベル賞のもつ意義と限界を冷静に見極め、果たしてきた役割を改めて評価する必要がある。ノーベル平和賞にノミネートされた日本人候補者も少なくないが、これまで実際に受賞したのは1974年の佐藤栄作元首相のみである。しかし、受賞発表時から現在まで続く佐藤の受賞に対する厳しい批判を考えれば、当時のノーベル委員会がアジア、日本の情勢について十分な理解を有していなかったことは確かである。佐藤の受賞は、ノーベル平和賞がグローバルな賞になるための貴重な試練であったといえるかもしれない。（キーワード：ノーベル平和賞、ノルウェー、佐藤栄作、賀川豊彦、渋沢栄一、日本外務省）

#### Summary

The objective of this paper is to review the Nobel Prize from the perspective of International Politics by focusing on the Nobel Peace Prize and to examine Japan's historical involvement in the prize. A total of 16 Japanese have been awarded the Nobel Prize as of 2009 and most of the laureates won the prize in natural science field. In Japan, there is total belief in the Nobel Prize

of the natural science field, whereas arbitrariness and political nature of selection were always controversial. With due consideration of political wills in the Nobel Prize, we need to assess significance and limitation of the prize rationally and to reevaluate the role it played so far. While not a few Japanese were nominated for the Nobel Peace Prize, Eisaku Sato, former Prime Minister was the only prize laureate; he was awarded in 1974. However, harsh criticism against his prize-winning, which started at the announcement of the prize-winning, continuing even now, indicates that the then Nobel Committee did not have full understanding of Asia's and Japan's situations. It might be said that Sato's prize-winning was a valuable challenge to make the Nobel Peace Prize a global prize.

Keywords: the Nobel Peace Prize, Norway, Eisaku Sato, Toyohiko Kagawa, Eiichi Shibusawa, Ministry of Foreign Affairs of Japan

## はじめに

本稿は、1901年以来、国際関係において「平和」概念の深化、拡大に大きな役割を果たしてきたノーベル平和賞を取り上げ、日本が同賞といかなる関係を歴史的に築いてきたかを考察するものである。その際、必要に応じて文学賞など平和賞以外の賞についても言及する。

筆者は、2003年に『日本人は北欧から何を学んだか——日本・北欧政治関係史入門——』の中でノーベル賞についても若干触れた<sup>1)</sup>。特に、第二次世界大戦直後の1949年に物理学者の湯川秀樹京都大学教授が日本人として初めてノーベル賞（物理学賞）を受賞した後、ノーベル賞の存在は科学者のみならず一般国民の間でも大々的に注目された。ノーベル賞に対するあこがれは、日本においてスウェーデンの平和的イメージを補強することになり、それは現在の日本においてもプラスに作用しているといえよう。前述の拙著では、紙幅の都合からノーベル賞と日本との関わりをエピソードの一つとして簡単にしか紹介できなかった。

ノーベル賞はすでに1世紀を超える歴史をもち、現在では物理学賞、化学賞、生理学・医学賞、文学賞、平和賞、経済学賞<sup>2)</sup>の6分野にまたがる賞として発展を遂げている。それらをすべて扱うことは、一個人の能力をはるかに超えるものである。そのため、本稿では筆者の専門である国際政治学という視点からノーベル賞を捉え直し、その事例として平和賞に注目して分析を進める。平和賞については、日本でも大きな関心はあるものの、後述のようにこれまでのところ学問的な分析対象とされてきたとは必ずしもいえない状況にある。そうした状況を少しでも改善し、ノーベル平和賞が国際政治の力学の中で発展を遂げてきたことを知ることは、ノーベル賞について日本人の理解を深めることに貢献するであろう。

また、日本人のノーベル賞受賞者は、後述のように2009年現在16名を数える<sup>3)</sup>。自然科学分

野の日本人受賞者が13名と珍しくない状況になっているのに対して、平和賞受賞者は1974年受賞の佐藤栄作元首相（首相任期1964～1972年）のみである。なお、文学賞受賞者が2名（1968年の川端康成、1994年の大江健三郎）、経済学賞受賞者がいない状況を考えるならば、日本は人文・社会科学分野のノーベル賞に弱いと指摘できるかもしれない。そこには、欧米とは異なる言語・文化、政治外交面の弱さなどの諸問題が背景にあらう。その点で、佐藤栄作元首相の平和賞受賞は、日本にとって極めて珍しい存在であり、これを分析することで、日本とノーベル平和賞との関係の一端も明らかにできるであろう。なぜ佐藤栄作元首相は平和賞をもらうことができたのであろうか。また、1世紀以上の歴史の中で、なぜ佐藤栄作元首相以外に日本から平和賞受賞者が出なかったのであろうか。これは、日本の問題であると同時に、選考するノルウェー側の問題でもあるかもしれない。受賞する側の日本にとってのノーベル平和賞の意味を考える必要性和同時に、授与する側のノルウェーにとってのノーベル平和賞の意味も考える価値は大きいであろう。

以上のように、現在、ノーベル平和賞と日本との歴史的関係について本格的に考察する重要性が高まっている。その準備段階として、本稿では第1章においてノーベル平和賞をめぐるこれまでの研究を整理しつつ、筆者の問題意識を明らかにする。次に第2章で日本とノーベル賞との全体的な関係を考える上で、日本人のノーベル賞歴代受賞者の傾向を簡単に検討し、さらに文学賞をめぐる日本政府の対応を紹介する。第3章ではノーベル平和賞にノミネートされた日本人候補者について、現段階で判明している事実関係を整理し、さらに平和賞をめぐる日本政府の対応を紹介する。第4章ではノーベル平和賞を受賞した唯一の日本人、佐藤栄作元首相に焦点をあて、受賞をめぐる経緯をこれまで公刊されている資料に基づいてまとめる。最後に、これらの作業を通じて今後の日本とノーベル平和賞との関係について展望したい。

## 1 今なぜノーベル平和賞なのか

### (1) 問題の所在

毎年10月から12月にかけて、日本のみならず世界においてノーベル賞の選考結果と受賞者の業績に対して、目が向けられる。1901年に始まったノーベル賞は、今や世界で最も権威のある賞となり、その重要性については誰も異論のない存在となっている。選考結果についても疑問が出されることは少ない。その結果、たとえば日本においては自然科学分野の学術振興をめざす「第2期科学技術基本計画」（2001～2005年度）において「ノーベル賞に代表される国際的科学賞の受賞者を欧州主要国並に輩出すること（50年間にノーベル賞受賞者30人程度）」<sup>4)</sup>と具体的に明記された。ここでいうノーベル賞とは、物理学賞、化学賞、生理学・医学賞の自然科学3賞のことを指していると考えられる。バブル経済崩壊後、低迷する日本経済を立て直すために、日本政府は「科学技術創造立国の実現」を掲げ、「知の創造と活用により世界に貢献できる国」を「目指すべき国の姿」の1つにすえたのである。その際、自然科学分野の目標をノーベル賞受賞者数という

目に見える形でアピールしようとしたのであろう。ノーベル賞をめざすことが自然科学分野の研究者の使命として奨励されたのである<sup>5)</sup>。この事例は、ノーベル賞に対する日本人の見方を象徴している。第1に、今後の学術活動を評価する際、日本の自前の評価基準よりもノーベル賞を高く評価していることに示されるように、ノーベル賞に対して絶対的な信頼感がおかれている。第2に、日本ではノーベル賞を見る場合、自然科学分野に注目しすぎる傾向も指摘できる。その際、自然科学分野でもノーベル賞の対象である物理学、化学、生理学・医学が重視され、その他の分野が軽視されているといえるかもしれない。人文・社会科学分野では、ノーベル賞をめざすことが学術振興の目標とされることすらなく、自然科学分野に比べると同分野のノーベル賞への理解度も低いといわざるを得ない。

ノーベル賞は果たして純粋に学術活動を評価できる客観的な指標と見ることができるのであろうか。日本においては、ノーベル賞の権威があまりにも高く評価されすぎてきた結果、一種の「神話」ができていないのではないだろうか。特に、ノーベル賞を運営するノーベル財団<sup>6)</sup>、受賞者を選考する各選考委員会が不偏不党、公平中立な立場に徹し、学術的に妥当な選考がなされていると広く考えられている。しかしながら、実際には選考側の恣意性、政治性も指摘できるのではないか。自然科学分野に限ってもさまざまな研究分野があり、多くの候補者がいる中で、いつ誰にいかなる理由で賞を授与するかは、選考する側の判断次第である。また、ノーベル賞を利用して自国の対外的イメージを高め、国のブランド力を最大限活かそうとするスウェーデン政府、ノルウェー政府の外交政策という視点も無視できないのではないだろうか。さらに候補者のノミネートから選考の過程で世界から最先端、最新の情報を獲得する手段となり、それが両国の学術振興、政治外交面での活動を支える基盤となっていることも見逃せない。以上のように、ノーベル賞は両国の「ソフト・パワー」の源泉になっていると指摘することができよう。かかる視点に立った場合、ノーベル賞の政治的意図を考慮した上で、ノーベル賞のもつ意義と限界を冷静に見極め、100年以上にわたって世界において果たしてきた役割を改めて評価する必要があるように思われる。まさにノーベル賞の脱「神話」化が求められているといえよう。

以上のノーベル賞の恣意性、政治性は自然科学分野のノーベル賞でも見出すことはできるであろうが、人文・社会科学分野のノーベル賞、特にノーベル平和賞では極めて顕著である。それゆえ、本稿ではノーベル平和賞を事例として取り上げ、日本との関係の中で賞の恣意性、政治性がいかに出ているかに注目したい。

## (2) ノーベル平和賞の研究動向と史料

ノーベル平和賞について、いかなる史料があり、これまでいかなる研究がなされてきたのであろうか。ノーベル賞関連の著作としては、まずノーベル賞を生み出したノーベル (Alfred Bernhard Nobel) に関して数多くの伝記類や書簡集が国内外で出版されてきた。ノーベルは、子供向け伝記の定番でもあり、世界において無数の伝記が出されている。しかし、ノーベル自身は自伝を残さず

に死去したため、世界中の多くの伝記の種本となり、最も信頼されているものはノーベル財団関係者による伝記である。その例として、シュック (Henrik Schück)、ソールマン (Ragnar Sohlman) による伝記<sup>7)</sup>、ベルイェングレン (Erik Bergengren) による伝記<sup>8)</sup> が重要である。ともにノーベル財団の所有する資料に基づき、定評のある伝記となっている。これらは早い段階で邦訳されており、ノーベルとその賞に対する日本での関心の高さを示している。また、1991年にスウェーデンで刊行された書簡集<sup>9)</sup>は、ノーベル自身の手による数少ない資料であり、本人の人間性や賞が生まれた背景を知る上で貴重であるが、ノーベル平和賞のその後の発展を分析する資料としては不十分であろう。同書もすぐに邦訳されている。

次にノーベル賞の歴代受賞者についてであるが、受賞理由や業績について知る上で最も重要なものは、ノーベル財団が毎年刊行している年鑑『ノーベル賞』である<sup>10)</sup>。これは、その年のノーベル賞に関するノーベル財団による公式記録と位置づけられるものである。授賞式の内容、受賞者の紹介、受賞者の記念スピーチなどの重要情報がすべて収録されている。歴代受賞者の受賞記念スピーチについては、出版社から分野別のスピーチ集も定期的に出されている<sup>11)</sup>。また、歴代受賞者については、全受賞者を網羅した百科事典的な経歴・業績集が数多くの出版社から出されている。これも受賞者を知る上で基礎的な資料となるであろう。たとえば、この例としてアメリカの研究者、アブラムス (Irwin Abrams) が編集した文献<sup>12)</sup>は最も定評がある。平和賞の歴史、特徴がまとめられ、さらに歴代受賞者の人物像、受賞理由が網羅されている。賞の全体像を知る上では、貴重な文献である。その系譜に位置づけられる一冊として、ノルウェーのノーベル研究所が全面的に協力して2001年にノルウェーで出版された文献もある<sup>13)</sup>。これは、ノーベル平和賞創設100周年記念の受賞者紹介であり、ノルウェーのノーベル研究所の公式見解ではないにしても、ノーベル研究所の史料もできる限り踏まえたものであり、各受賞者についてのノルウェー側の評価を知る上で有益であろう。また、ノーベル財団がノーベル賞100周年を記念して日本を含む世界各地で開催した展覧会の図録も、ノーベル賞と受賞者について貴重な情報を提供している<sup>14)</sup>。その他、受賞者に関する個別研究・紹介なども考えれば、数多くの文献が世界各地に存在している。

しかし、以上の文献の多くは、概してノーベル賞をめぐる上記「神話」を補強するようなものが多いといえよう。ノーベル賞自体に関する学術的研究は、日本においても、外国においてもまだ多くないのが現状である。ノーベル賞の恣意性、政治性に注目し、ノーベル平和賞をめぐる政治力学を実証的に検証しようとする研究は極めて少ないといってよい。ノーベル賞が権威ある賞としての地位を確立した現在、それを検証することは困難になっている。その背景には、後述のように、ノーベル賞選考に関する史料上の制約もある。ただし、ノーベル賞創設100周年を迎えた2000年以降、ノルウェーのノーベル研究所の史料を駆使した歴史研究も徐々になされるようになっていく。すなわち、史料公開の50年ルールに基づき、20世紀前半までの選考過程について歴史研究がノルウェー人研究者らにより発表されるようになった<sup>15)</sup>。しかし、かかる歴史研究はようやく始まったばかりであり、平和賞の批判的検証は十分になされているとは言い難い状況である。その対象は第二次

世界大戦前の時期で止まっている。

無論、日本でもノーベル賞について研究はなされてきた。特に、自然科学分野については、科学史家の岡本拓司がスウェーデンのノーベル財団により公開された史料を駆使して、20世紀前半までの時期における選考過程について日本人ノーベル賞受賞者と候補者を中心に研究している<sup>16)</sup>。しかし、平和賞については、同様の歴史研究はまだ全くなされていない。また、ノーベル賞の全体像については、矢野暢京都大学教授による数少ない学術的研究がある。同書は、1章を割いてノーベル平和賞についても紹介を行ない、ノーベル平和賞の政治性について言及しているが、紙幅の都合もあり、必ずしも十分な検証を行なっている訳ではなく、日本とのかかわりの分析も極めて弱いといわざるを得ない<sup>17)</sup>。

本稿の筆者は、前述のように日本と北欧諸国との政治関係を歴史的に分析する研究を発表し、その中で日本外務省外交史料館にて発見した日本外務省のまとめたノーベル賞ファイル<sup>18)</sup>を基に、ノーベル賞に対する日本の対応についても言及した。しかし、分析はまだ不十分であり、さらに詳細に研究する必要がある。

以上のように、これまで学術的研究の対象としてほとんど取り上げられてこなかったノーベル平和賞について、正面から取り上げること自体、極めて新しいことである。ノーベル平和賞の脱「神話」化を試みることで、国際関係における同賞の役割を改めて考えることができよう。特に、1901年以來の歴代受賞者を分析することで、ノーベル平和賞の意図してきた「平和」の意味の多様性と変遷、さらにその「平和」を求めたノルウェーの選考委員会、政府の意図を歴史的に検証できる。まさに20世紀初頭以來の「平和」概念の変遷と国際関係の特徴を明らかにできよう。また、ノーベル平和賞は前述のようにノルウェー政府にとって「ソフト・パワー」の一手段と位置づけることもでき、今や仲介外交の成功で国際的評価の高いノルウェーの外交政策の分析という点でも意味をもつであろう。

さらに日本とのかかわりを歴史的に研究することも重要であろう。自然科学分野の日本人受賞者については、前述のように日本人科学史家による歴史研究が徐々になされているが、人文・社会科学分野の研究はこれまで全くなされていなかった。その点で、これまで明らかにされてこなかった日本とのかかわりを国内外の史料に基づいて少しでも解明することが求められている。佐藤栄作元首相の受賞をめぐる経緯やその他の日本人候補者などの動向、日本側の受賞工作など、不明な点は多い。

なお、史料という点では、スウェーデン、ノルウェーや関係各国の文書館などにて史料調査を精力的に行なう必要があるが、現在のところ限界があることも指摘しておきたい。ノーベル賞の選考に関する第一次史料は、スウェーデンのノーベル財団およびノルウェーのノーベル研究所において厳重に管理されている。そこでは50年ルールが厳格に適用されており、公開後の整理期間なども考慮すれば、現在のところまだ1950年代までの史料しか見ることはできない。日本とノーベル平和賞とのかかわりについては、日本外務省外交史料館の史料もある。同史料館は、基本的に30年ル―

ルで史料公開が行なわれているが、個人のプライバシーなどへの配慮もあるせいか、すべてが公開されているわけではない。実際に、佐藤栄作元首相の受賞について史料はほとんど出ていない状況である。

## 2 ノーベル賞と日本

### (1) 日本人の歴代受賞者

表1に示される通り、2009年現在、日本人のノーベル賞受賞者は16名となった。1949年に湯川秀樹京都大学教授が初めてノーベル物理学賞を授与されて以来、60年間の結果である。

湯川は1940年から物理学賞を選考するスウェーデン王立科学アカデミーに物理学賞候補として推薦されはじめ、1949年にはアメリカ、フランス、スウェーデンの科学者10名から推薦を受けていた。スウェーデン王立科学アカデミーの物理学賞委員会および総会は圧倒的支持で湯川の受賞

表1 ノーベル賞日本人受賞者一覧

受賞年	賞	氏名 (生没年)	
1949年	物理学賞	湯川秀樹	(1907～1981年)
1965年	物理学賞	朝永振一郎	(1906～1979年)
1968年	文学賞	川端康成	(1899～1972年)
1973年	物理学賞	江崎玲於奈	(1925年生まれ)
1974年	平和賞	佐藤栄作	(1901～1975年)
1981年	化学賞	福井謙一	(1918～1998年)
1987年	生理学・医学賞	利根川進	(1939年生まれ)
1994年	文学賞	大江健三郎	(1935年生まれ)
2000年	化学賞	白川英樹	(1936年生まれ)
2001年	化学賞	野依良治	(1938年生まれ)
2002年	物理学賞	小柴昌俊	(1926年生まれ)
2002年	化学賞	田中耕一	(1959年生まれ)
2008年	物理学賞	南部陽一郎*	(1921年生まれ)
2008年	物理学賞	小林誠	(1944年生まれ)
2008年	物理学賞	益川敏英	(1940年生まれ)
2008年	化学賞	下村脩	(1928年生まれ)

出所：ノーベル財団ホームページ< <http://nobelprize.org/> >等により、筆者作成。2009年現在。

\*南部陽一郎は、現在、アメリカ国籍である。

を決めている<sup>19)</sup>。湯川の受賞は、第二次世界大戦に敗北し、連合国の占領下におかれた日本人にとって、大きな喜びと希望を与えるものであった。たとえば、当時の小学校教科書も早速この受賞を取り上げ、次世代を担う子供たちにその感動を伝えている。「昭和二十四年の『文化の日』に、いかにもこの日にふさわしいニュースがもたらされ、われわれ日本人の心を明かるくした。それは湯川秀樹博士が、ノーベル賞の中の物理賞の受賞者に内定したしらせであった。世界文化の大きな歩みの中に、進出していく日本人のすがたを、まのあたりに見るような気持がして、国民に深い感動と大きな希望をあたえないではなかった」という文章ではじまった紹介は、ノーベル賞、授賞式の様子を説明した後、最後に「これを読んで、当日の光景を想像し、その感じきを新たにするとともに、さらに日本人の進出を期待したいものである」と結んでいる<sup>20)</sup>。その後の日本は、まさにこの「日本人の進出」を達成してきたといつてよいであろう。

しかし、表2にあるように、その後の日本人ノーベル賞受賞者の受賞年代、分野を詳細にみると、その道のりは、険しいものであった。1949年の湯川に続く日本人の受賞者はなかなか現れなかった。2人目の受賞者は1965年にノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎であった。すでに16年の歳月が流れていた。朝永の名前は1965年以前から候補者として挙がっていたと考えるのが普通であるが、現在のところ、選考過程の詳細は不明である。

1968年には3人目のノーベル賞受賞者として川端康成が文学賞を受賞している。川端は、インドのタゴール (Rabindranath Tagore, 1913年文学賞受賞) 以来、アジアから2人目の文学賞受賞者であった。タゴールの場合、当時のインドがイギリス植民地であり、タゴール自身が英文の著作も出していたことを考慮すると、非欧米言語の文学として川端の受賞はノーベル文学賞のグロー

表2 分野別日本人受賞者数

分野	受賞年代							計
	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	
物理学賞	1	0	1	1	0	0	4	7
化学賞	0	0	0	0	1	0	4	5
生理学・医学賞	0	0	0	0	1	0	0	1
文学賞	0	0	1	0	0	1	0	2
平和賞	0	0	0	1	0	0	0	1
経済学賞	-	-	0	0	0	0	0	0
計	1	0	2	2	2	1	8	16

出所：表1に基づいて筆者作成。南部陽一郎を含む数字である。経済学賞は、1969年度から授与開始。2009年現在。



バル化に大きな意味をもつものであった。自然科学分野のノーベル賞に比べると、ノーベル文学賞には言語、文化などの壁が大きく立ちふさがり、日本をはじめとする非欧米諸国の者が獲得するのはそれまで極めて困難であった。川端のノーベル文学賞受賞に到達するまでには関係者の並々ならぬ苦勞があったことは、次節でみる外務省史料にも見出すことができる。

1970年代以降も90年代まで、10年に1人、2人の受賞が続くことになる。ただし、この間、受賞分野は物理学、文学以外に徐々に広がりを見せていた。平和賞は1974年に佐藤栄作が、化学賞は1981年に福井謙一が、生理学・医学賞は1987年に利根川進が日本人として初めて受賞している。しかし、1969年に授与を開始した経済学賞は現在に至るまで依然として受賞者がいない状況にある。

2000年代になると、状況が変化することになる。2000年、化学賞を白川英樹が受賞する。自然科学分野での日本人の受賞は、13年ぶりのことであった。第1章で紹介したように、2001年3月、日本政府が「第2期科学技術基本計画」（2001～2005年度）において「50年間にノーベル賞受賞者30人程度」と打ち出した背景には、それまで自然科学分野で受賞者が伸びなかったことへの危機感があった。しかし、その2001年以後、物理学賞、化学賞において受賞者が急増した。2000年代はそれまでの約50年間に獲得した受賞者数と並ぶ8人が受賞している。第二次世界大戦後、戦災による疲弊から復興を遂げた日本が研究を蓄積し、多様な人材を育成してきた結果が表れたのであろう。特に、自然科学分野の場合、受賞理由となる研究成果と実際の受賞との間には数十年の時間差があることも普通であるため、戦後の学問の発展が徐々に成果を上げているといえよう。

自然科学分野の受賞者決定は、学問の専門性から国際的な学界での評価や貢献から徐々に絞られていくのが通常である。たとえば、理論に対する授与は、他の科学者による実験という検証を経て初めて可能になる。また、ある発見も、その後の応用により、その重要性が再認識され、初めて受賞対象になることもある。それゆえ、科学者同士の評価が収斂し、定着するには、一定の時間の経過が必要となる。2000年代以降の日本人受賞者にも、そうした事例が見られる。その意味では、自然科学分野の受賞者決定は、学界において専門家により絞られてきた者の中から、どの専門分野からいつ誰を選ぶかという選択になろう。その決定は、最終的に物理学賞、化学賞であればスウェーデン王立科学アカデミーが行ない、生理学・医学賞であればカロリンスカ研究所が行なうのである。

これに対して、人文・社会科学分野の受賞者決定は、より曖昧な要素をもつといえよう。日本人受賞者も、こうした傾向の影響を受け、これらの分野では苦戦を強いられてきたのかもしれない。特に、文学賞と平和賞は、候補者を客観的に評価する国際的な学界が存在するわけではなく、スウェーデンおよびノルウェーの選考委員会<sup>21)</sup>の価値観が自然科学分野の賞以上に直接に反映されやすい。また、平和賞においては、受賞対象の業績と授与との間に十分な時間をおかず、評価の収斂、定着を待たないものも多く、より一層問題を複雑にしている。逆にいえば、これらの分野では受賞する側のアピールが重要な意味をもつ余地も大きいといえるかもしれない。実際に日本人の受

賞者を出すために、日本政府も文学賞と平和賞で積極的な活動を展開している。その点を次節以降で見よう。

## (2) ノーベル文学賞の日本人候補者

文学賞について、現在分かっている範囲で日本人候補者をめぐる動きを見ておこう。ノーベル財団は1950年までの文学賞について選考過程をホームページ上のデータベースで公表している。それによれば、すでに1940年代から日本人が文学賞の候補者となっていた。

日本人で最初に文学賞候補者として登場したのは、1947年の賀川豊彦<sup>22)</sup>であった。彼は翌48年にも再び候補者となっている。彼は、後述のように1950年代にはノーベル平和賞の候補者にもなっている。賀川を47年に推薦したのは、スウェーデンのストックホルムにある王立文学史・古美術アカデミー会員であったヴェストマン (Knut B. Westman) であり、48年に推薦したのは、地理学者、探検家でスウェーデン・アカデミー会員であるヘディン (Sven Hedin) であった<sup>23)</sup>。しかし、1947年、1948年の文学賞の選考で賀川は残れず、1947年にはフランスの作家、ジイド (André Paul Guillaume Gide)、1948年にはイギリスの詩人、エリオット (Thomas Stearns Eliot) が受賞している。

キリスト教の牧師であると同時に、社会運動家、作家であった賀川は、プリンストン大学、プリンストン神学校で教育を受けたこともあり、度々海外を訪問した。北欧諸国も3度訪問し、北欧でも著名な日本人であった。1925年5月にデンマーク、1936年7月にノルウェー、スウェーデン、フィンランド、1950年6月～7月にデンマーク、スウェーデン、ノルウェーを訪問した。滞在中、賀川は各地の教会、学校、協同組合、工場などを視察するとともに、毎日のように精力的に講演、布教活動を行なった。その規模は数十人程度から1万5000人にも及ぶものであった<sup>24)</sup>。

ノーベル財団のデータベース上では、1951年以降に文学賞にノミネートされた日本人についてはまだ不明であるが、2009年9月に『朝日新聞』が文学賞選考母体であるスウェーデン・アカデミーに対して行なった情報公開請求の結果によれば、1947年、48年の賀川に続く日本文学賞候補者として1958年に作家の谷崎潤一郎、詩人の西脇順三郎が推薦されていた。特に、谷崎はアメリカ人作家バック (Pearl Buck、1938年ノーベル文学賞受賞)、日本文学研究者キーン (Donald Keene)、ハーバード大学教授のライシャワー (Edwin Oldfather Reischauer)、作家の三島由紀夫ら5人の推薦を受け、一定の評価を得ていた<sup>25)</sup>。しかし、同年の文学賞は最終的にソ連の作家、パステルナーク (Boris Leonidovic Pasternak) に授与された。

その後も、数人の日本人が文学賞の候補者になっていたことが日本外務省の史料によりわかる。日本外務省は、1960年代初めに日本人の文学賞受賞をめざして積極的な情報収集活動、受賞工作をしている。特に、松井明在スウェーデン大使 (任期1959～1962年) の活動は注目値する。

1960年3月、松井大使は、「当国々立図書館長 Uno Willers」<sup>26)</sup> から同年度のノーベル文学賞候補者として西脇順三郎と谷崎潤一郎が取り上げられていることを伝えられ、スウェーデン・アカ

デミーに報告ができるように「両者についての検討 (Comparing Analysis) 及びその著書」を送付してほしいとの依頼を受けている。これはスウェーデン・アカデミーからの依頼とされている。この件を本省に報告した公信において、松井大使は「理化学の場合と異り、文学については必ずしも明瞭な尺度がある訳でなく、選衡は極めて困難と思はれるが、又一方東洋文学者中、受賞者の皆無に近い現状においては工作如何により受賞の可能性は充分あるものと考えられる」と述べ、さらに「こゝ2・3年の間に本使としては是非ともわが国より受賞者を出したいと念願している」としている。そのための方策として、松井大使は前年度の文学賞受賞者や翻訳の関係から米英等から推薦を得ることを紹介している<sup>27)</sup>。

同年4月、上記依頼を受けて、外務省本省は、谷崎潤一郎と西脇順三郎の両者に関する資料を収集し、英文の極めて詳細な履歴書、作品リストなどを松井大使に送っている。松井大使は、同資料を「当国々立図書館長 Uno Willers」に提出している<sup>28)</sup>。

1961年1月末には、松井大使は「ノーベル賞受賞委員会書記長 Willers」(上記国立図書館長と同一人物)に接触し、積極的な情報収集を行なっている。それによれば、1960年度にノーベル文学賞候補として谷崎、西脇が挙がっていたことを確認するとともに、1961年度の候補者として1961年1月31日現在、「ストックホルム大学教授 Henry Olsson」(スウェーデン・アカデミー会員、文学賞選考委員会委員)が川端康成を推しており、谷崎、西脇については推薦状が未着との情報を得ている。松井は川端と並んで、前年度候補者の谷崎、西脇も候補者リストに記載するよう要請し、日本から推薦状を速やかに取得することを約束したのに対し、先方はこの要請を受け入れている。松井はすぐに本省に川端、谷崎、西脇3名の推薦状発出手配をするよう要請している<sup>29)</sup>。その後、本省は松井大使に対して、西脇については前年と同様に辻直四郎東京大学教授が推薦者となり、電報、書簡が発出され、谷崎については嶋中事件(1961年2月に起こった右翼少年による中央公論社社長宅襲撃事件)により再三の連絡の末に中央公論社社長名の推薦電報がようやく発出されたが、書簡が発出されていないことを伝え、さらに川端の推薦者の選定には「苦慮した模様であるが、当方のあっせんもあり、三島由紀夫氏を推せん者として近く電報及び書簡を発出することとなった」としている<sup>30)</sup>。推薦者の調整に奔走する本省の苦労が伝わる話である。

1962年2月にも、松井大使は「ノーベル賞委員会書記長 Dr. Uno Willers」に接触し、1962年度のノーベル文学賞候補者として同年2月1日現在34名が挙がり、日本から谷崎、川端が含まれているとの情報を得ている。その際、「日本二候補者の翻訳著書が少ないことが難点である。瑞アカデミー会員中には Henrik Nyberg 教授(ウプサラ大)の如く川端氏を強く推すものも存在するが、総じて翻訳著書僅少な日本人作家にはハンディ・キャップのあることは否み難い。この点もし右両作家の著書に翻訳計画が進行中であれば、その翻訳原稿なりとも送付して貰えれば効果的であろう。又翻訳の場合はまず英訳が第一に行われるのが常であろうから米英筋から側面的に推薦工作が行われることが効果的であろう」との助言があったことも、松井大使は本省に伝えている<sup>31)</sup>。

同年3月には、スウェーデンの詩人、小説家でノーベル文学賞選考委員を務めていたマッティ

ンソン（Harry Edmund Martinson、1974年ノーベル文学賞受賞）が来日し、日本の作家らと懇談している。その際、マッティンソンは62年度のノーベル文学賞候補に日本の3作家が挙がっていることを告げ、日本の推薦機関が弱体なため不利であり、早急に権威ある推薦委員会を設けるべきことを提案している。3作家の名前は明らかにされなかったが、これを報道した新聞は3人を谷崎、川端、西脇であるとみている<sup>32)</sup>。上記の外務省の史料と照らしても、この推測は確実であろう。

以上のように、日本の外交史料により明らかになった1960年代初めの動きだけを見ても、外務省が日本人のノーベル文学賞受賞に向けて積極的に情報収集活動を展開していたことがわかる。上記のように、文学賞の場合、日本語作品には翻訳の存在が欠かせず、さらに国際的知名度の無さを埋めるために有力な推薦者、推薦機関の存在も重要な意味をもったのであろう。こうした問題を解決するためにはさらに地道な活動を積み重ねる必要があり、松井大使の在任中には日本人受賞者は出なかった<sup>33)</sup>。また、政府によるノーベル賞獲得運動が逆効果になることもありうるとの認識も外務省内にはあり<sup>34)</sup>、慎重な活動が必要であった。その結果、日本人の受賞は結局1968年の川端康成まで待たされたのである。非欧米地域からの受賞がいかに困難であったかがわかる。その点では、1940年代後半の段階で有力なスウェーデン人から文学賞候補者として推薦されていた賀川豊彦は、極めて例外的な存在であろう。これは、賀川自身のキリスト教を土台とする国際的活動と多数の翻訳書に基づく知名度によるものであろう。

### 3 ノーベル平和賞と日本

#### (1) ノーベル平和賞の日本人候補者

1974年に日本人として初めて佐藤栄作元首相がノーベル平和賞を受賞するまでに、同賞の候補者になった日本人はいたのであろうか。前述の文学賞と同様に、ノーベル財団のデータベースをまず見てみよう。これによれば、1956年までの選考過程が公表されており、日本人の平和賞候補者もいる。

最初に登場するのは、1926年の渋沢栄一である<sup>35)</sup>。ノーベル財団のデータベースによれば、「政治家、金融家、産業家。日本最初の銀行の創立者」と紹介されている。また、動機として「渋沢は日本の産業発展に関係するほぼすべての企業に関わった。彼は、カリフォルニアの日本人労働者の法的地位に関して日米関係の改善のために活動した。慈善事業に専念するため、1916年に引退した」と説明されている。推薦書は2通ある。1通目はハワイ大学教授(日本の言語・歴史)の「Tasuku Harada」からであり、平和賞選考委員「Ragnvald Moe」による評価を受けており、「推薦にはハワイ大学総長のA. L. Deanの支持がある」とのコメントが付されている<sup>36)</sup>。2通目は、加藤高明首相(任期1925～1926年)からである。同じく平和賞選考委員「Ragnvald Moe」による評価を受けており、コメント欄には「加藤は日本の著名政治家数人を代表して渋沢をノミネートした。支持の署名はMasaharu Anasaki(宗教史教授)によって集められたようだ。David Starr Jordanが推薦状で

渋沢を推薦した」と記されている<sup>37)</sup>。

渋沢は、翌27年にも平和賞候補者として推薦されている。推薦書は1通ある。それは、若槻礼次郎首相（任期1926～1927年、1931年）<sup>38)</sup>と幣原喜重郎外相（任期1924～1927年、1929～1931年）の連名のものである。同年は、平和賞選考委員からの評価は受けていない。なお、コメント欄には「若槻と幣原は著名人数名を代表して渋沢をノミネートした」と記されている<sup>39)</sup>。

渋沢は、結局ノーベル平和賞をもらうことはなかった。1926年の受賞者はフランス外相のブリアン（Aristide Briand）とドイツ外相のシュトレゼマン（Gustav Stresemann）であった<sup>40)</sup>。また、1927年の受賞者はフランスのビュイソン（Ferdinand Buisson）とドイツのクヴィッデ（Ludwig Quidde）であった<sup>41)</sup>。しかし、すでに第二次世界大戦前の時点で、当時の日本の現職首相、外相がノーベル平和賞を意識し、日本人を推薦していたことは、ノーベル賞と日本との関係を考える上でも貴重な事例であろう。1920年代の国際協調時代に花を添える活動といえるかもしれない。

その後、日本人で平和賞候補者となったのは、1954年、55年、56年と3年連続でノミネートされた賀川豊彦である<sup>42)</sup>。賀川が平和賞にノミネートされていたことは、広く知られていた。たとえば、『賀川豊彦全集』第24巻の年表には、1955年2月に「ノーベル平和賞候補者として推薦される」、1959年2月21日には「世界連邦建設同盟総会でノーベル平和賞候補推薦を決議」、同年7月には「米国教会に賀川をノーベル平和賞候補に推薦運動起る」とある<sup>43)</sup>。ノーベル財団はノーベル賞の選考過程を50年間、秘密にしており、外に漏らすことはほとんどない。それ以前にノーベル賞候補者が明らかになるのは、候補者の推薦者からと考えられる。無論、推薦者についても50年間の守秘義務があるが、必ずしも守られていないのであろう。

1954年に賀川を候補者に推した推薦書は2通ある。ノーベル財団のデータベースでは、賀川は「作家、社会改革家」とされ、「国家間の和解のための活動によりノミネートされる」との動機が記されている<sup>44)</sup>。これらは1955年、56年の推薦データにも記されている。推薦者の一人は、片山哲元首相である<sup>45)</sup>。もう一人の推薦者は、アメリカ人のボルチ（Emily Greene Balch、1946年ノーベル平和賞受賞）であった。両名からの推薦は、平和賞選考委員「O. T. Røed」による評価を受けている。

1955年にも賀川は平和賞に推薦されている。推薦は1通であり、推薦者はノルウェー国会の5議員とある。この推薦は、平和賞選考委員「Knut Getz Wold」による評価を受けた。コメント欄には「1954年にも評価された」とある。1956年の賀川の推薦も1通であり、推薦者はノルウェー国会の7議員とある。この推薦は、平和賞選考委員「August Schou」の評価を受けている。コメント欄には「1954年、1955年にも評価された」とある。

以上のように、ノーベル財団のデータベースによれば、1901年から1956年までの間に渋沢栄一、賀川豊彦が複数年にわたり平和賞の候補者となっていた。ともに受賞には至らなかったものの、日本人による国際的な平和活動が注目されたという点では、特筆に値することであろう<sup>46)</sup>。なお、日本外務省の史料によれば、第二次世界大戦後、上記の事例以外にもノーベル平和賞にノミネート

された日本人がいたとされるが、その候補者については次節で紹介する。

## (2) ノーベル平和賞と日本政府

日本政府はノーベル文学賞のみならずノーベル平和賞に対しても常に強い関心を示してきた。それは、日本外務省の史料に見出せる。外務省は1950年代からその選考方法（特に推薦の手続き）に強い関心を示し、在日ノルウェー公使館、在スウェーデン日本国公使館（ノルウェーを兼轄）を通じて調査を依頼している。1953年3月18日付けの日本外務省から在日ノルウェー公使館への口上書では、ノーベル平和賞に関して「(一) 日本国政府が一定の候補者を推薦する場合にとるべき手続およびその径路、(二) 一九五三年度同賞候補者として既にノルウェー国会のノーベル委員会に推薦されている者の氏名」を尋ねている。結城司郎次在スウェーデン日本公使は、ノルウェー外務省次官らに接触し、特に(二)の候補者に関しては「ノーベル委員会にて洩らざることとなりおるにつき悪しからず」との回答を得ている<sup>47)</sup>。このノーベル平和賞に対する関心は、1952年から53年に日本政府がメキシコ政府からアレマン (Miguel Aléman Valdés) 同国大統領をノーベル平和賞候補者に推薦する動きを支持してくれるよう依頼され、さらにその後、ブラジル政府からもフェルナンデス (Raul Fernandes) 同国元外相のノーベル平和賞候補者推薦に支持をしてくれるよう依頼されたことがきっかけと考えられる<sup>48)</sup>。

しかし、日本政府は、各国の政府関係者、国会議員も推薦人になれることを確認してからも、1950年代には政府として実際に推薦を行なうことはなく、推薦はあくまでも個人ベースの問題として処理されていた。日本外務省の史料をみると、1960年代半ばまでに若干の日本人が候補者として推薦されていたのがわかる。無論、それは推薦された日本人すべてではないであろうが、判明した顔ぶれだけをみても極めて興味深いものがある。ノーベル平和賞に推薦されていたのが明確な候補者は前述の賀川豊彦、哲学者の鈴木大拙である。

1960年1月中旬、衆議院副議長の杉山元治郎議員（日本社会党）<sup>49)</sup>が賀川豊彦をノーベル平和賞候補としてノーベル委員会に推薦した。同年2月23日、外務省本省はその推薦が推薦締切日の2月1日までにノーベル委員会に届いたかを確認するよう、板垣修在ノルウェー大使に訓令を発し、翌24日、板垣大使は「ノーベル平和賞委員会は賀川氏に関する推せん書類を受理し、これを審理しうる状態にある旨確認した」と回訓している<sup>50)</sup>。しかし、賀川は同年4月23日に72歳で死去している。ノーベル財団の規則によれば、1974年より前までは死後にもノーベル賞を授与した例があるが<sup>51)</sup>、賀川は選ばれなかった。1960年の平和賞受賞者は保留となり、1961年に1960年分として南アフリカのルトウーリ (Albert John Luthuli) が選ばれた。賀川がノーベル委員会の選考過程でどこまで評価されていたか、気になるところである。

1963年2月12日には、外務省本省は勝野康助在ノルウェー大使に対して、岸本英夫東京大学教授が鈴木大拙をノーベル平和賞に推薦したことを通知し、ノーベル平和賞選衡委員会が推薦を受領したか確認するように指示するとともに、鈴木大拙に関する関係資料を送付している<sup>52)</sup>。1963

年のノーベル平和賞は、赤十字国際委員会、赤十字社連盟に授与された。

以上のように、1960年代にも日本人のノーベル平和賞候補者が推薦され、日本外務省もその支援活動を行なっている。文学賞候補者と同様に、日本外務省の関心は極めて高かったと考えられる。これらの関心の高さと活発な活動が1970年代の佐藤栄作元首相の平和賞受賞につながっていくのであろう。なお、本稿で利用した外務省史料『ノーベル賞関係雑件』ファイルにおけるノーベル平和賞に関する部分は9項目からなるが、そのうち項目8（マイクロフィルムで約100カット）は完全に削除され、非公開とされている。前後の項目から判断して1960年代前半にあたる部分であるが、何が削除されたのか興味あるところである。個人のプライバシーあるいは政治的配慮から削除されたのであろうが、日本人候補者の推薦活動の史料という可能性もあると考えられる。

## 4 佐藤栄作元首相とノーベル平和賞

### (1) 佐藤栄作元首相の受賞

日本とノーベル賞との関係を考えて際、画期的な出来事として、1974年に佐藤栄作元首相がノーベル平和賞を受賞したことがある。前年にアメリカのキッシンジャー国務長官（Henry Alfred Kissinger）とともに平和賞に選ばれたベトナム民主共和国の労働党中央委員会政治局員、レ・ドゥク・ト（Le Duc Tho）が受賞を辞退したため、佐藤はアジアから最初の平和賞受賞者となった。

1974年10月8日、ノルウェーのノーベル委員会は平和賞受賞者としてアイルランド元外相、アムネスティ・インターナショナル元議長でナミビア担当国連高等弁務官を務めていたマックブライド（Sean MacBride）と日本の佐藤を選出した。佐藤の受賞理由として、和解政策により太平洋地域の安定的な条件づくりに大きな貢献を果たしたこと、核兵器を保有しないと主張し、核拡散防止条約に署名したことが挙げられた。在任中に佐藤がアメリカから小笠原諸島と沖縄を返還させることに成功し（それぞれ1968年6月、1972年5月）、非核三原則を提唱し、1970年2月に核拡散防止条約に署名したことが評価されたのである。推薦者については、「ノーベル平和賞受賞者には翌年の受賞候補者についての推薦権が一票与えられることになっており、佐藤さんの場合は、前年の受賞者である米国のキッシンジャー博士の推薦があった」とされる<sup>53)</sup>。1974年12月10日、佐藤は「賑やか、しかも壮麗な式」<sup>54)</sup>であったオスロ大学講堂での授賞式に出席し、「私の生涯における最も忘れがたい瞬間である」と喜びをかみしめた<sup>55)</sup>。翌11日には、佐藤は楠田實元首席秘書官や学者ら<sup>56)</sup>が草稿をつくった「核時代における平和の追求と日本」という受賞記念スピーチを行なった（在英日本大使館の太田博一等書記官が代読）<sup>57)</sup>。なお、授賞式、受賞記念スピーチは滞りなく実施されたが、授賞式当日にはオスロの会場前に佐藤の受賞を批判する学生デモ隊が押しかけ、投石する一幕もあった。これは、ベトナム問題などで、アメリカ寄りの政策をとってきた佐藤に対する批判と考えられる。

## (2) 受賞理由

ノルウェーのノーベル委員会<sup>58)</sup>はなぜ佐藤への受賞を決めたのであろうか。選考過程は50年経たないと公開されないため、ノーベル委員会発表の受賞理由から推測するしかない。受賞理由で興味深いのは、日本が核兵器を保有しないことを主張し、核拡散防止条約に署名したことをノーベル委員会が高く評価していることである。授賞式でも、リオネス (Aase Lionæs) ノーベル委員会委員長は佐藤の紹介の中でヒロシマ、ナガサキにふれた後、「日本国民は核兵器に対してアレルギーになっていると、時折言われてきた。この種のアレルギーは健康のあらわれであり、他の諸国もこれから教訓を学べるかもしれない」と述べ、日本人の核アレルギーを肯定的にとらえている。また、リオネス委員長は、核拡散防止条約について日本がこれに署名した後、まだ批准していないことにふれ、「日本国民の態度が将来の展開を形づくるうえで決定的であると言っても差し支えないと、私は強調したい。ノーベル委員会が希望するのは、本年の授与が核拡散防止条約にできる限り広範な支持を確保しようと取り組んでいるすべてのものへの激励と理解されることである」としている<sup>59)</sup>。

この当時、インドの地下核実験成功(1974年5月18日)に見られるように、世界的に核兵器の拡散が問題となっていた。核保有国でもフランス、中国は核拡散防止条約への参加を拒んでいた。そのため、ノーベル委員会は同条約を確固としたものにし、世界的な核拡散の流れを変える上で、日本の非核政策が利用できると考えたのではないだろうか。つまり、日本は同条約に署名したものの、国内の調整がつかずまだ批准していない状態であったため、これへの日本の参加を後押しし(日本の批准書寄託は1976年6月8日)、さらに自ら核兵器の保有を放棄して経済大国となった日本を非核国家のモデルとして世界に示し、核保有の誘惑に駆られる国々を牽制したかったのではないだろうか。その点で、佐藤の業績について評価が分かれ、国際的に知名度がないとしても、ノーベル委員会はあえて佐藤への授与を決断したのではないかと思われる。

## (3) 国内外の反響

佐藤の受賞に対する反応には喜びばかりでなく、厳しい批判もあった。ノーベル平和賞は、その他のノーベル賞とは異なり「平和」についての政治的判断に基づく選考とならざるを得ない。平和賞にはノーベル委員会の考える「平和」へのメッセージ、つまり政治的な意図が込められていると考えるべきであろう。そのため、受賞者をめぐり度々議論が起こることになった。佐藤の受賞もその1つといえよう。

日本国内では、佐藤率いる自民党政府と長年対立してきた野党、あるいは自民党内でも佐藤と対立した国会議員から見ると、受賞理由となった問題で佐藤のとった行動は疑問の多いものでしかなかった。また、受賞の知らせが届いた1974年10月、日本国内ではちょうどアメリカ海軍退役少将ラロック (Gene Robert Larocque) のアメリカ議会証言をきっかけにアメリカ軍艦船が日本に核兵器を持ち込んでいるのではないかという疑惑が大問題になっており、非核三原則の実効性に疑問が投げかけられていた。その結果、批判はノーベル平和賞にも向けられた。たとえば、「ノーベル



平和賞のあり方そのものに疑問を抱かせる授賞だ。去年のキッシンジャー米国務長官の受賞以来、おかしいと感じていたがいよいよその感を深くした」（日本社会党の成田知己委員長）、「あ然とするほかない。ノーベル賞の信用も地に落ちた」（自民党の宇都宮徳馬衆議院議員）のように、ノーベル賞に対する失望すら表明されたのである<sup>60</sup>。

海外の反応でも、佐藤の国際的知名度の無さ、アメリカ寄りのベトナム政策、中国政策などからその受賞に驚きと疑問の声が上がったが、基本的に簡単な紹介が多かった。そうした海外の報道の中で、最も注目されたのは、アメリカの『ワシントン・ポスト』紙の記事であった。同紙は、受賞発表直後から佐藤の受賞について「日本人が驚き、困惑、ブラックユーモアをもって反応した」と伝えるなど、日本国内の動きも詳細に報道していたが、10月12日には佐藤のノーベル賞受賞をめぐる秘密工作を詳しく報道している<sup>61</sup>。それによれば、10月11日、鹿島建設会長の鹿島守之助と元国連大使の加瀬俊一が1973年8月から14カ月にわたり佐藤の受賞運動を秘密裏に展開していたことを明らかにしたとある。同記事は、具体的に様々な活動を紹介している。たとえば、以下の通りである。

- ・加瀬が外務省顧問の肩書で1973年秋に約10カ国を2カ月かけて回り、佐藤の推薦を働きかけた。
- ・日本外務省がアジアを中心に外交官を使って佐藤の推薦への支持を取り付けさせた。
- ・候補者が少なくとも1冊の本を出していることが好まれるとし、急遽佐藤の英語版演説集 *In Quest of Peace and Freedom* を500部限定で刊行した<sup>62</sup>。同書は市販されず、佐藤の序は加瀬が代筆した。
- ・1973年12月28日、鹿島と加瀬は、現職首相、外相を含む17名の同意を得た佐藤の推薦書を日本外務省に提出した。同推薦書は1974年1月28日、在ノルウェー日本大使によってノーベル委員会に提出された。
- ・受賞発表数週間前には、加瀬がノルウェーを訪問し、ノーベル委員会の委員に会った。全運動は秘密裏に行なわれ、それはノーベル委員会の要請であった。

以上のように、同記事は詳細に受賞工作を紹介している。同記事は、最後に「これは次期選挙において自民党にとって良いことになると思う。特に、女性の間で」という鹿島のコメントで締め括っている。

この記事に触れられた佐藤の受賞工作は、ノルウェーにおいても10月12日付けの『ダーグブラデット』紙が「日本の大資本が平和賞を『買った』。ノーベル委員会は佐藤に騙された」と報道し、大きな反響を呼び起こした<sup>63</sup>。翌13日、ノーベル委員会は5人の委員のうち4人が集まり、この問題を協議している。これに参加したグレーヴェ（Tim Greve）ノーベル委員会書記は、佐藤の運動が通常のものであることを指摘し、加瀬がオスロに来て、佐藤を推薦したことを認めた。また、グレーヴェは『ワシントン・ポスト』紙が報道した500部印刷の本ではないが、佐藤の演説集の本をノーベル委員会がもらったことも認めている<sup>64</sup>。その後、この問題は徐々に終息していくが、

受賞工作在佐藤の受賞に対して悪いイメージを植え付け、ノルウェー側にしこりを残したことは確かであろう。

#### (4) 受賞工作

佐藤をめぐる受賞工作は、佐藤の日記でも裏付けられている。前述の鹿島守之助、加瀬俊一が中心となり、さらに佐藤の元首相秘書官で外務省の本野盛幸も加わり<sup>65)</sup>、受賞運動が展開されたことがわかる。たとえば、1973年7月29日の日記には「次は加瀬俊一君の夫妻がやって来て鹿島君からいゝつけられたノーベル平和記念章に小生を推薦するとの事。詳細打合せをしてかへす」とあり、さらに同年8月10日には「加瀬俊一君がノーベル平和賞の運動にかゝり度いと云って夫人と共に来る。鹿島さんの発想でこれから取りくみ度いと。政界の人のつながり等彼の不得手な点も補ふ要があり、大平外相を相談相手にも出来ず一寸困る。然し本野参事官を招致して取り扱方を相談して見る積りで」とある。本野参事官に関しては、8月13日の日記に「最後は本野外務参事官でノーベル平和賞への推薦を加瀬俊一君と一緒にやって呉れ、然し噂にならぬ事と口どめをする。加瀬君と充分連絡をとる様にと注意する」とあり、いよいよ運動が開始されたのがわかる<sup>66)</sup>。

同年10月1日には、「加瀬俊一君が打合わせに来る。鹿島守之助氏の力の入れ方はすばらしい。果たして期待にそえるか。吉田元首相をすゝめた因縁もあり、小生の場合も吉田さんに結びつける事に注意して」と佐藤は日記に記し、吉田茂元首相のノーベル平和賞受賞工作があったことを示唆している<sup>67)</sup>。12月7日には、加瀬が佐藤を訪問し、首相、外相、蔵相のサインを取りたいと提案したことが日記に記され、さらに「ノーベル賞の審査員は相当な進歩学者なので、東南アジアの諸国の指導者にも協力を求める積りの由」ともある<sup>68)</sup>。これは、外務省がアジアで推薦工作进行を精力的に実施させたという前述の『ワシントン・ポスト』紙の記事とも符合する話である。

1974年になっても、加瀬が時折佐藤を訪問し、受賞工作の報告をしているが、1973年に比べると日記に具体的な記述は少ない。ノーベル委員会に正式に佐藤の推薦がなされ、後は待つだけという状況になった結果であろう。加瀬、鹿島への感謝の言葉が日記には多く、たとえば受賞発表後の1974年10月13日には「今回の受賞のかげに加瀬君の努力のある事を忘れるわけにはゆかぬ」とあり、同年12月31日には「鹿島平和財団の効績は小生の平和賞受賞には役立った事は見逃せない」とある<sup>69)</sup>。なお、ノーベル賞について佐藤の興味深い見方として、1974年11月11日の日記には佐藤が右翼政治家の赤尾敏と面会したことが書かれ、「小生のノーベル賞受賞については赤の謀略だから気をつけろと注意する。ノーベル賞は彼が云ふ様な心配の面が全然ないとはいえない。自ら注意する事」と記している<sup>70)</sup>。

以上の受賞工作は、突然始まったというよりも、第2章、第3章で言及した1960年代以来の外務省の情報収集活動の延長線上にあるものと理解すべきものかもしれない。1960年代にはまだ明らかになっていない様々な活動もあると思われる。吉田元首相へのノーベル平和賞受賞工作もその1つである。それらの活動経験が佐藤の受賞に向けて総動員され、花開いたのであろう。

## (5) 現在の評価

第1章で言及したように、ノルウェーで2001年にノーベル平和賞の全受賞者を解説する本が出版された。これは、同賞の100周年を記念する企画であり、ノルウェー・ノーベル研究所から支援を受けており、同研究所のルンデスタ理事長（Geir Lundestad）が序文を寄せている。同書の佐藤に関する解説は、受賞理由について「賞をグローバル化し、日本において平和の意志を強め、それを核軍縮のための活動につなげようとする期待が、佐藤の平和賞受賞の最重要理由であった」と述べている。さらに、同解説は、アメリカの公開文書によれば、佐藤が日本の核兵器への主要な反対者ではなかったこと、さらに1969年に在日アメリカ大使との会話の中で日本の反核政策を「ナンセンス」としていたことなどを紹介している<sup>71)</sup>。また、同書の執筆者の1人であるステネルセン（Øivind Stenersen）は、出版記念の記者会見において「佐藤氏を選んだことはノーベル賞委員会が犯した最大の誤り」と批判したとされる<sup>72)</sup>。このように、ノルウェーでは佐藤に対して極めて厳しい評価となっている。

他方、日本国内でも、佐藤については非核三原則、沖縄返還をめぐる密約の存在がいわれ続けてきた経緯があり、佐藤の評価は難しい。たとえば、1969年11月の日米首脳会談で締結されたといわれる緊急時の沖縄への核持ち込みの合意、その後の沖縄返還交渉での米軍用地原状回復費用の日本側肩代わりなどがあるが<sup>73)</sup>、こうした問題は当時から政治の争点になってきたものであった。

かかる問題があったにもかかわらず、ノーベル委員会が佐藤に平和賞を授与したのは、欧米人だけでなく、アジア人にも平和賞を授与しようとして1973年に失敗し、今度こそはアジア人に授与したかったこと、核拡散の危険性が高まっていたことがあろう。佐藤側の受賞工作がそのポイントに合わせてうまく情報提供を行なったことも一定の効果をもたらしたと考えられる。しかし、受賞発表時から現在まで続く佐藤の受賞に対する国内外の厳しい批判を考えれば、当時のノーベル委員会アジア、日本の情勢について十分な理解を有していなかったことだけは確かであろう。佐藤の受賞は、まさにノーベル平和賞がグローバルな賞になるための貴重な試練であったといえるかもしれない。

## おわりに

以上、日本とノーベル賞との関係を平和賞に焦点をあて、試論的にまとめた。史料の制約もあり、分析は不十分なものの、これまでかかる研究は日本になく、知られていなかった事実関係を多く提起できたのではないと思われる。

ノーベル委員会が平和賞を発展させるため、1世紀以上にわたり世界中から情報を収集し、真摯な議論を積み重ねて受賞者を決定してきたことは評価できるが、その過程で様々な問題に直面したのも事実であろう。特に、平和賞については、受賞理由となる「平和」の中身に関して合意がなく、いかなる「平和」に賞を授与するかは、極めて難しい問題であり続けている。なぜならば、「平和」

は時代とともに変化するものであるからである。その時々で国際関係の争点は変化し、さらに国際関係を担うアクターも多様化してきた。そのため、いかなる理由で誰に平和賞を授与するかは、常に国際関係の現実との緊張関係の中で決定されてきたのである。今後も国際関係は変化し続けるのであり、この緊張関係はなくならないであろう。それを乗り越え、将来の変化にも耐えうる「平和」を見極める目がノーベル委員会には求められているのである。

以上の性格をもつ平和賞に対して、日本も第二次世界大戦前から関わりを有してきた。特に、第4章で取り上げた佐藤栄作元首相の平和賞受賞は、日本にとってもノーベル委員会にとっても大きな試練であった。佐藤が受賞者に選出されたこと、さらにそれをめざして周到な受賞工作が展開されたことは、様々な議論を呼び起こした。その意味では、日本とノーベル平和賞との関係は難しい形で出発することになった。佐藤以後、日本人の平和賞受賞者はいない。次に受賞する日本人がいかなる人物で、「平和」のためにいかなる活動をしたかは、今後の日本とノーベル平和賞との関係を考える上で極めて重要となろう。そのためにも、まずは日本人がいかなる「平和」に取り組み、いかなる貢献ができるのかを自ら問い続け、実践を積み重ねていかなければならない。それが日本とノーベル平和賞との間で実り多い関係を築く基盤となるからである。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

〔註〕

- 1) 拙著『日本人は北歐から何を学んだか——日本・北歐政治関係史入門——』(新評論、2003年)、88-91、115-124頁。なお、本稿は同書の調査結果に新たに入手した情報を追加する形で執筆したため、重複する部分もある。
- 2) 経済学賞は、ノーベルの遺言によるものではないため、正確にはノーベル賞ではない。1968年にスウェーデン銀行(中央銀行)から同行の創立300周年を記念して経済学賞を設けることが提案され、ノーベル財団がそれを受け入れ、ノーベル賞と同等の扱いをする賞として翌69年から始まったものである。正式名称は、「アルフレッド・ノーベルを記念するスウェーデン銀行経済学賞」である。ノーベル財団は、これ以後、新規に賞を設けることに否定的である。
- 3) アメリカ国籍を取得している南部陽一郎(2008年物理学賞受賞)を含む。ノーベル財団や日本の文部科学省は、南部を受賞時の国籍に従いアメリカ人として扱っている。
- 4) 「科学技術基本計画第1章基本理念2」(文部科学省ホームページ<[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kagaku/kihon/honbun/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kihon/honbun/003.htm)> 2009年12月1日確認)。なお、同基本計画は、2001年3月30日に閣議決定された。
- 5) ノーベル賞についての具体的数字は、その後、妥当性について議論を引き起こした。2006年3月28日に閣議決定された「第3期科学技術基本計画」(2006～2010年度)では、第2期基本計画において「50年間にノーベル賞受賞者30人程度を輩出することを掲げた」と言及した上で、「第3期基本計画の科学技術政策がその実現に貢献するものとなるよう、人に着目した考え方に立って基礎研究等を推進していくことが求められる」とややトーンダウンした表現となった(「科学技術基本計画第1章基本理念3」文部科学省ホームページ<[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kagaku/kihon/06032816/001/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kihon/06032816/001/001.htm)> 2009年12月1日確認)。
- 6) 本稿では、「Nobelstiftelsen」を「ノーベル財団」、「Nobel Institutet」を「ノーベル研究所」と訳す。
- 7) Henrik Schück and Ragnar Sohlman, *The Life of Alfred Nobel* (London: William Heinemann, 1929)。邦訳は、H・シュツク、R・ゾルマン『大ノーベル傳』菊池武一訳(東峰書房、1942年)。
- 8) Erik Bergengren, *Alfred Nobel* (Stockholm: Gebers, 1960)。邦訳は、エリック・ベルイェングレン『ノーベル伝』松谷健二訳(白水社、1968年)。
- 9) Kenne Fant, *Alfred Bernhard Nobel* (Stockholm: Norstedts Förlag, 1991)。邦訳は、ケンネ・ファント『アルフレッド・ノーベル伝——ゾフィーへの218通の手紙から——』服部まこと訳(新評論、1996年)。
- 10) Nobelstiftelsen, *Les Prix Nobel* (Stockholm: Nobelstiftelsen)。
- 11) Irwin Abrams ed., *Nobel Lectures in Peace 1971-1980* (Singapore: World Scientific Publishers, 1993)。
- 12) Irwin Abrams, *The Nobel Peace Prize and the Laureates: An Illustrated Biographical History, 1901-2001* (Canton, MA: Science History Publications, 2001)。同種の文献は、邦語でも見られる。溝川徳二編『ノーベル賞——受賞者総覧——』(教育社、1990年)。ノーベル賞人名事典編集委員会編『ノーベル賞受賞者業績事典 新訂版』(日外アソシエーツ、2003年)。堤佳辰『ノーベル平和賞——90年の軌跡と受賞者群像——』(河合出版、1990年)。

- 13) Øivind Stenersen, Ivar Libæk og Asle Sveen, *Nobels fredspris: Hundre år for fred, Prisvinnere 1901-2000* (Oslo: J. W. Cappelens Forlag, 2001). Øivind Stenersen, Ivar Libæk and Asle Sveen, *The Nobel Peace Prize: One Hundred Years for Peace, Laureates 1901-2000* (Oslo: J. W. Cappelens Forlag, 2001).
- 14) ウルフ・ラーション編『ノーベル賞の百年——素顔の創造性——』津金—レイニウス・豊子訳 (ユニバーサル・アカデミー・プレス、2002年)。
- 15) Ivar Libæk, “The Nobel Peace Prize: Some Aspects of the Decision-Making Process, 1901-17,” *The Norwegian Nobel Institute Series*, Vol.1, No.2, 2000. Øivind Stenersen, “The Nobel Peace Prize: Some Aspects of the Decision-Making Process, 1932-39,” *The Norwegian Nobel Institute Series*, Vol.1, No.4, 2000. Asle Sveen, “The Nobel Peace Prize: Some Aspects of the Decision-Making Process, 1919-31,” *The Norwegian Nobel Institute Series*, Vol.1, No.3, 2000.
- 16) 岡本拓司「ノーベル賞文書からみた日本の科学 1901 - 1948 年」(『科学技術史』第 4 号、2000 年)。同「日本人とノーベル物理学賞 1901 年 - 1949 年」(『日本物理学会誌』第 55 巻第 7 号、2000 年)。その他、日本では自然科学分野の日本人受賞者に関して紹介文献が数多く出版されている。たとえば、以下を参照。馬場鎌成『ノーベル賞の 100 年——自然科学三賞でたどる科学史——』(中公新書、2002 年)。高橋繁行『日本の歴代ノーベル賞』(アスキー新書、2009 年)。読売新聞編集局編『ノーベル賞 10 人の日本人——創造の瞬間——』(中公新書ラクレ、2001 年)。
- 17) 矢野暢『ノーベル賞——二十世紀の普遍言語——』(中公新書、1988 年)、162-187 頁。
- 18) 『ノーベル賞関係雑件』(外務省外交史料館、マイクロフィルム・リール番号 I 0011)。
- 19) 「湯川理論 戦中から海外で評価、ノーベル賞選考の舞台裏あきらかに」(『朝日新聞』2000 年 1 月 5 日夕刊)。岡本、前掲「日本人とノーベル物理学賞：1901 年 - 1949 年」。
- 20) 「大きな歩み (一) 日本人の進出」(『希望 新国語六年下』光村図書出版株式会社、1950 年文部省検定済)、4、10 ページ。
- 21) 文学賞は、スウェーデン・アカデミーが選考を行なう。平和賞は、他の賞とは異なり、ノルウェー国会の任命するノーベル委員会によって選考が行なわれる。これは、ノーベルが賞についての遺言を残した 1895 年当時、スウェーデンとノルウェーが同君連合を形成していた名残である。なお、経済学賞はスウェーデン王立科学アカデミーが選考を行なう。
- 22) 「賀川豊彦 ノーベル文学賞候補に 2 回」(『読売新聞』2009 年 9 月 14 日朝刊)。賀川 (1888 ~ 1960 年) は、神戸市生まれ、神戸神学校生時代から神戸のスラムに住み込み、救済活動を展開した。アメリカ留学 (1914 ~ 1917 年) 後は、労働運動、農民運動、普通選挙権獲得運動、生活協同組合運動など幅広く社会運動を行なった。また、生涯を通じてキリスト教の伝道を国内外で積極的に行なった。自伝的小説『死線を越えて』(1920 年) など著作も多い。賀川の著作は、1930 年代からスウェーデン語に続々と翻訳され、確認できたものだけでも 10 冊は超えている (スウェーデン王立図書館ホームページ < <http://ask.kb.se/> > の蔵書検索を参照。2009 年 12 月 1 日確認)。
- 23) ノーベル財団ホームページ < <http://nobelprize.org/> > (2009 年 12 月 1 日確認)。
- 24) 拙著『日本人は北欧から何を学んだか——日本・北欧政治関係史入門——』、43-46 頁。賀川の北欧観と北欧旅行の詳細は、賀川豊彦『雲水遍路』(改造社、1926 年)、『世界を私の家として』(第一書房、1938 年) を参照。ともに、賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』第 23 巻 (キリスト新聞社、1963 年) に収録されている。また、『賀川豊彦全集』第 24 巻 (キリスト新聞社、1964 年) の「身辺雑記」、「年表」も参照。
- 25) 「谷崎、ノーベル文学賞候補だった」(『朝日新聞』2009 年 9 月 23 日朝刊)。
- 26) Uno Willers (1911 ~ 1980 年) は、1952 年から 1977 年までスウェーデン王立図書館館長として同図書館の発展に手腕を発揮するとともに、同時にスウェーデン・アカデミーのノーベル委員会書記も長く務めている (たとえば、スウェーデン王立図書館ホームページ < <http://www.kb.se/om/verksamhet/historik/> > 参照。2009 年 12 月 1 日確認)。
- 27) 「極秘 第 136 号、昭和 35 年 3 月 23 日、在スウェーデン特命全權大使松井明発外務大臣藤山愛一郎宛、ノーベル賞 (文学) 受賞候補者に関する件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 28) 「極秘 情交第 47 号、昭和 35 年 4 月 21 日、藤山大臣発在スウェーデン松井大使宛、ノーベル賞受賞候補者に関する件」、「極秘 情交第 50 号、昭和 35 年 4 月 27 日、藤山大臣発在スウェーデン松井大使宛、ノーベル賞 (文学) 受賞候補者に関する件」、「極秘 第 226 号、昭和 35 年 5 月 27 日、在スウェーデン特命全權大使松井明大使発外務大臣藤山愛一郎宛、ノーベル賞 (文学) 受賞候補者に関する件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 29) 「秘 第 4 号、昭和 36 年 1 月 31 日、松井大使発小坂大臣宛、ノーベル文学賞受賞候補者に関する件」、「第 52 号、昭和 36 年 2 月 2 日、在スウェーデン特命全權大使松井明発外務大臣小坂善太郎宛、本年度ノーベル文学賞候補者に関する件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 30) 「秘 情交第 25 号、昭和 36 年 2 月 23 日、小坂大臣発在スウェーデン松井大使宛、ノーベル文学賞受賞候補者の件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 31) 「第 78 号、昭和 37 年 2 月 1 日、在スウェーデン松井大使発外務大臣宛、ノーベル文学賞候補者に関する Willers 書記長との会談に関し報告の件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 32) 「日本から三作家、ノーベル文学賞候補」(『朝日新聞』1962 年 3 月 6 日朝刊)。「ノーベル文学賞をめぐる」(『朝日新聞』1962 年 3 月 12 日朝刊)。
- 33) 本節で言及した時期のノーベル文学賞受賞者は、以下の通り。1960 年はフランスの詩人、サン＝ジョン・ペルス (Saint-John Perse)、1961 年はユーゴスラヴィアの詩人、アンドリッチ (Ivo Andrić)、1962 年はアメリカの作家、スタインベック (John Steinbeck) であった。

- 34) 「昭和 32 年 10 月 28 日、在スウェーデン特命全権公使島重信発情報文化局高橋参事官宛」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 35) ノーベル財団ホームページ< <http://nobelprize.org/> > (2009 年 12 月 1 日確認)。
- 36) Tasuku Harada は、同志社社長、総長を歴任後、1920 年から 1932 年までハワイ大学教授を務めた原田助 (1863 ~ 1940 年) である。A. L. Dean は、原田をハワイ大学に招聘した総長である。渋沢との接点を含めて、ハワイ大学時代の原田については、以下を参照。太田雅夫「原田助とハワイ大学」(『キリスト教社会問題研究 (同志社大学)』第 46 号、1998 年 1 月)。渋沢の推進した民間経済外交に焦点をあてた評伝として、以下を参照。木村昌人『渋沢栄一——民間経済外交の創始者——』(中公新書、1991 年)。
- 37) Masaharu Anasaki は、東京帝国大学の宗教学教授、姉崎正治 (1873 ~ 1949 年) の可能性が高い。David Starr Jordan は、インディアナ大学、スタンフォード大学の総長を務め、平和運動にも貢献した人物 (1851 ~ 1931 年) である。
- 38) データベースには、「E. Wakasuta」とあるが、職業欄に首相とあるので、若槻礼次郎と考えられる。
- 39) ノーベル財団ホームページ< <http://nobelprize.org/> > (2009 年 12 月 1 日確認)。
- 40) プリアンとシュトレゼマンは、1925 年のロカルノ条約締結が受賞理由となった。
- 41) ヴェイツンは、ソルボンヌ大学教授の後、人間法連盟 (Ligue des Droits de l'Homme) の創立者・総裁であった。クヴィッデは、ベルリン大学教授、ワイマール共和国国会議員を務め、ドイツ平和協会会長でもあった。ともに平和運動の指導者であった。
- 42) ノーベル財団ホームページ< <http://nobelprize.org/> > (2009 年 12 月 1 日確認)。
- 43) 賀川豊彦全集刊行会編、前掲『賀川豊彦全集』第 24 巻、621、623 頁。
- 44) 賀川は、戦前からの社会運動、キリスト教の布教活動のほか、第二次世界大戦後は世界連邦運動にも尽力し、1954 年には世界連邦世界運動副会長にもなった。こうした活動も平和賞候補者としての推薦に影響を与えたのかもしれない。
- 45) データベースには、「Totsu Katalayama」とあるが、国が日本で、職業が国会議員とあるため、片山哲元首相と考えられる。
- 46) ノーベル財団データベースには、日本人が平和賞候補者として外国人を推薦した事例もある。紙幅の都合で詳細を紹介することはできないが、たとえば、1929 年に日本の貴族院議長がアメリカの社会福祉事業家、アダムス (Jane Addams、1931 年ノーベル平和賞受賞) を推薦した。また、1955 年には国会議員数名がイギリスの自由党党首、世界政府議員協会会長、デイヴィス (Clement Davies) を推薦し、1956 年には国会議員数名がルーマニア出身の作家、レルギス (Eugen Relgis) を推薦している。
- 47) 「欧米四第 10 号、昭和 28 年 3 月 18 日附、外務省発在京ノールウェー公使館、(ノーベル平和賞に関する件)」、「第 112 号、昭和 28 年 4 月 27 日、在スウェーデン特命全権公使結城司郎次発外務大臣岡崎勝男宛、ノーベル平和賞候補者推せんに関する査報方の件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 48) 「メキシコ大統領アレマン推薦関係」、「伯国人フェルナンデス推薦関係」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 49) 杉山元治郎議員は賀川豊彦とともに田中耕太郎を平和賞候補者に推薦したとする外務省文書もあるが、起案日がなく、詳細は不明である(「ノーベル平和賞候補推薦に関する従来の取扱い」『ノーベル賞関係雑件』)。田中耕太郎 (1890 ~ 1974 年) は東京帝国大学教授、文部大臣、参議院議員、最高裁判所長官、国際司法裁判所判事を歴任した法律家である。
- 50) 「第 5 号、昭和 35 年 2 月 23 日、藤山大臣発在ノールウェー板垣大使宛、賀川豊彦氏のノーベル平和賞候補推薦の件」、「第 11 号、昭和 35 年 2 月 24 日、板垣大使発藤山大臣宛、賀川豊彦氏のノーベル平和賞候補推せんの件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 51) 1931 年の文学賞受賞者、スウェーデンの詩人、カールフェルト (Erik Axel Karlfeldt) と 1961 年の平和賞受賞者、スウェーデン人の国連事務総長、ハマーショルド (Dag Hjalmar Agne Carl Hammarskjöld) が死後、賞を授与されている。規則改正で、1974 年以後は受賞発表前に死亡した場合は受賞の対象とならないことになった。
- 52) 「極秘 欧西第 15 号、昭和 38 年 2 月 12 日、外務大臣発在ノールウェー勝野大使宛、ノーベル平和賞候補推せんに関する件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 53) 楠田實『楠田實日記——佐藤栄作総理首席秘書官の二〇〇〇日——』(中央公論新社、2001 年)、901 ~ 902 頁。
- 54) 伊藤隆監修『佐藤栄作日記』第 6 巻 (朝日新聞社、1999 年)、235 頁。
- 55) 「佐藤さん、平和賞受ける」(『朝日新聞』1974 年 12 月 11 日朝刊)。
- 56) 学者とは梅棹忠夫国立民族学博物館館長、京極純一東京大学教授、高坂正堯京都大学教授、山崎正和大阪大学教授であり、その他に外交官の岡崎久彦、思想家の安岡正篤からの意見も参考にされた(楠田、前掲『楠田實日記——佐藤栄作総理首席秘書官の二〇〇〇日——』、899 ~ 900 頁)。
- 57) 同上、899 ~ 901 頁。伊藤監修、前掲『佐藤栄作日記』第 6 巻、236 ~ 237 頁。スピーチ全文については、以下のノーベル財団年鑑を参照されたい。Nobelstiftelsen, *Les Prix Nobel en 1974* (Stockholm: Nobelstiftelsen, 1975), s.227-235. その邦訳は、佐藤栄作「ノーベル平和賞受賞記念講演、核時代における [平和] 追求と日本」(自由民主党編『自由民主党史 資料編』自由民主党、1987 年)。
- 58) 佐藤の受賞を決めたノーベル委員会委員は、Aase Lionæs (委員長、労働党)、Bernt Ingvaldsen (副委員長、保守党)、John Sanness (労働党)、Egil Aarvik (キリスト教国民党)、Trygve Haugeland (中央党) の 5 名である (Nobelstiftelsen, *Les Prix Nobel en 1974*, s.5 およびノーベル財団ホームページ< <http://nobelprize.org/> > 2009 年 12 月 1 日確認)。国会の任命する 5 名のノーベル委員会委員は、国会の政党勢力を反映して政党色をもつ。
- 59) リオネス委員長の紹介スピーチ全文については、以下のノーベル財団年鑑を参照されたい。Nobelstiftelsen, *Les Prix*

*Nobel en 1974*, s.50-58.

- 60) 「佐藤前首相にノーベル平和賞」、「平和ニッポン“団体賞”」(『朝日新聞』1974年10月9日夕刊)。「ノーベル平和賞 佐藤前首相に」、「佐藤前首相のノーベル平和賞受賞 冷ややかな目で」(『毎日新聞』1974年10月9日夕刊)。「佐藤さん、平和賞受ける」(『朝日新聞』1974年12月11日朝刊)。
- 61) Don Oberdorfer, “Japan Surprised By Sato’s Award,” *Washington Post*, 10 October 1974, p.A28. Don Oberdorfer, “High-Level Drive Won Sato’s Nobel,” *Washington Post*, 12 October 1974, pp.A1, A19. 同紙の主張を裏づける活動を加瀬自身も詳細に語っている(加瀬俊一「<インタビュー>ノーベル平和賞の舞台裏」『自由』第16巻第12号、1974年12月)。たとえば、外国の著名人に推薦状を依頼することも重視された。実際にライシャワー・ハーバード大学教授は加瀬らに依頼されて推薦状を書いたと告白している(E・ライシャワー「核のカサとノーベル平和賞」『中央公論』1974年12月、38頁)。
- 62) Eisaku Sato, *In Quest of Peace and Freedom* (Tokyo: The Japan Times, 1973). 同書は、序、演説の翻訳、略歴を合わせて224頁からなる。ノルウェーのノーベル研究所図書館の蔵書データベースには存在しない。日本の国会図書館には、1974年発行の第2刷が所蔵されている(蔵書印1975年5月12日)。
- 63) “Japansk stor kapital «kjøpte» fredsprisen. Nobel-komiteen ble narret av Sato,” *Dagbladet*, 12 Oktober 1974, s.1, 16.
- 64) “Komiteen angrer ikke,” *Dagbladet*, 14 Oktober 1974. “- Vi er ikke blitt lurt, sier Nobelkomiteen,” *Arbeiderbladet*, 14 Oktober 1974.
- 65) 鹿島(1896～1975年)は元外交官で外交史家の一面をもつとともに、自民党の参議院議員を務めた。鹿島と佐藤との関係は深く、佐藤の日記にも家族ぐるみの交友関係を示す記述が多い。受賞工作の時期においても、佐藤が赤坂プリンスホテルの改造に鹿島建設を使うよう、堤義明に依頼したという話が出てくる(1973年9月3日。伊藤隆監修『佐藤栄作日記』第5巻、朝日新聞社、1997年、448頁)。鹿島が佐藤のノーベル賞受賞に動いた経緯については、鹿島建設株式会社編『鹿島守之助——その思想と行動——』(鹿島出版会、1977年)、805～814頁を参照。加瀬(1903～2004年)は当時、鹿島が設立した鹿島平和研究所の理事であった。本野(1924年生まれ)は当時、外務省の官房総務参事官を務め、その後は経済局長、外務審議官、在フランス大使などを歴任した。本野は、受賞工作における加瀬の役割について冷めた視点で述懐している。本野は、外国で佐藤のことを理解してもらえよう、資料をつくり、各在外公館を通じて配布したとする(『本野盛幸オーラル・ヒストリー』政策研究大学院大学、2005年、204～207頁)。
- 66) 伊藤監修、前掲『佐藤栄作日記』第5巻、423、430、433頁。
- 67) 同上、467頁。吉田への受賞工作は3回行なわれ、結局、吉田の死去(1967年10月20日)で終わったとされる(加瀬、前掲「<インタビュー>ノーベル平和賞の舞台裏」、39～40頁。鹿島建設株式会社編、前掲『鹿島守之助——その思想と行動——』、806頁)。その後、鹿島は1972年に鳩山一郎元首相の夫人、鳩山薫を平和賞に推す運動も行なったが、失敗している(同上、806頁)。
- 68) 伊藤監修、前掲『佐藤栄作日記』第5巻、513頁。
- 69) 伊藤監修、前掲『佐藤栄作日記』第6巻、14～15、157、170、197、253頁。
- 70) 同上、215頁。
- 71) Øivind Stenersen, Ivar Libæk og Asle Sveen, *Nobels fredspris: Hundre år for fred. Prisivinnere 1901-2000*, s.207.
- 72) 『佐藤元首相の平和賞は疑問』(『朝日新聞』2001年9月5日夕刊)。「故佐藤栄作氏の平和賞 記念書籍で疑問呈す」(『日本経済新聞』2001年9月5日夕刊)。
- 73) たとえば、以下を参照。若泉敬『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』(文藝春秋、1994年)。西山太吉『沖縄密約——「情報犯罪」と日米同盟——』(岩波新書、2007年)。なお、1969年11月に佐藤・ニクソン間で結ばれた「合意議事録」が佐藤の遺品の中に存在することが、2009年12月22日、遺族により初めて公表された(「核密約文書が現存」『朝日新聞』2009年12月23日朝刊。「核密約文書佐藤元首相邸に」『読売新聞』2009年12月23日朝刊)。

付記

本稿は、2009年度高崎経済大学特別研究助成金による研究成果の一部である。高崎市および高崎経済大学に感謝申し上げます。

本年度をもって定年退職される和泉清司先生、清水武明先生には、これまでの御指導に対して心よりお礼申し上げます。御研究のますますの発展と御健勝を祈念いたします。

